

荒木恵作 「競争心」

<前編> 「レノマの時計」

- 全員 おはよう、昨日さあ…。
- 小川みどり おはよう、さっち。
- 木村幸子 おはよう、みどり。あ、そう言えば、バイトするところ決まった？
- みどり うん。まあ、一般的なんだけど、マックですることにした。
- 幸子 マックって、駅前の？ あんな目立つところじゃバレちゃうよ。
- みどり まあそんな時はそんな時よ。それより一日も早くお金が欲し～い。
- 幸子ナレーション わたしは木村幸子。青春高校 2 年生。クラスでは“さっち”って呼ばれています。今しゃべってたのは親友の小川みどり。明るくてとってもおしゃべりなんだ。でもすっごくライバル意識が強いんだよね。それが唯一好きになれないところかな。
- 友達 A ねえ見て見て。ニコルのカバン、彼に買ってもらっちゃった。
- 友達 B えー！ いいなあ。
- 友達 C これって、高いんだよね。
- 友達 A まあね。でも別に頼まないのに、買ってくれるって言うから買ってもらっちゃった。
- みどり (小声で)ふん、何がニコルよ。わたしだって…。
- 幸子 (モノローグ)あーあ、またみどりのヒガミが始まったよ。何ですぐカッカするんだろう。
- ナレーション みどりだけではない。ほかの女の子たちだって、同じ思いをしているに違いない。クラスのあちこちで、いろいろなものを見せ合って、自分のほうがいいと言っては優越感に浸り、自分が持てなかつたり品物が安いと言ってはヒガんでいる。毎日、これ“持ち物比べ”。だれも彼もがヒガみごっこ。だが、このライバル意識は品物だけにとどまらなかった。
- みどり ねえ、さっち。見て見て、買っちゃった。
- 幸子 へえ、ヴィトンのバッグ！ どうしたの？
- みどり 彼よ彼。ちょっとおねだりしたら、すぐ買ってくれちゃったの。
- 幸子 よかったじゃん。あれ？ でも彼とはこの前別れたんじゃないかな？
- みどり よくぞ聞いてくれました。新しい彼ができたの。
- 幸子 またあ？ 1 か月持たなかったじゃない。
- みどり だって A 組の美樹が青学の彼できたって自慢してたでしょ？ 前の彼って三流じゃない？ だから別れたの。
- 幸子 それだけでバイバイしちゃったの？
- みどり うん。だって三流なんてカッコ悪いもん。でね、今度の彼、慶応なの。

幸子 ふうん。

みどり やっぱ慶応ボーイよね。車なんかベンツよ。それに…。

幸子 慶応ボーイだか何だか知らないけど、それだけの理由で、前の彼と別れちゃったの？好きだから今まで付き合っていたんじゃないの？

ナレーション 何かが狂ってると思った。みんなが何から何まで競争している。その波に巻き込まれていく自分が怖かった。だれかが新しいものを持ってくれば、みんなが同じものを買って、だれかが彼を作れば、みんな我先に自分の彼を見つけて、付き合いだしていた。そんなことが毎日のように続いた。

(効果音) (教会のガヤ)

先生 はい、みんな静かにして。最近、学校に関係ないものを持ってきている人が多いみたいね。今までも多少そういう傾向あったけど、このごろやたらと目立ちます。それで今日は荷物検査をします。

生徒全員 「えー！」「きったねえ」「そりゃねえよ」「なんだよ急に」など、口々に。

先生 はいはい、みんなの言いたいことは分かったから、カバンの中のものを出しなさい。

生徒B 取られたものは、後で返してくれるんですか？

先生 まだ分からないわ。あなたたち次第でしょ。

ナレーション たくさんのものが取り上げられた。CD、ウォークマン、化粧道具、雑誌。そしてわたしの口紅。一本4,000円もしたディオールの口紅..。(一瞬高まり、BGMに)かわたしもクラスの中に染まって、みんなと競争していたのだ。でも自分ではそれに気づかず、わたしの中に潜んでいる競争心は、ますますエスカレートしていきのだった。

父親 幸子、最近お金の使い方が乱れてないか？いろいろなものを買すぎてるぞ。

幸子 そうかなあ。

母親 そうですよ。何に使ったのか知らないけど、今月のお小遣い、もうなくなっちゃったんでしょ？

幸子 だって少ないんだもん。

母親 そんなことあるもんですか。今まではちゃんと足りてたじゃない。

幸子 分かったわよ。使わなきゃいいでしょ、使わなきゃ！

(効果音) (バタバタ階段を走って上がっていく音。)

母親 ちょっと、幸子！

父親 全く

幸子モノローグ 何よ！こんなに少ないお小遣いじゃ、欲しいものが買えないじゃない。少ないのを少ないって言ってどこが悪いのよ。でも欲しいなあ、レノマの時計…。

ナレーション わたしは、父が中1の誕生日に買ってくれた時計を持っていた。でもあの光り輝くレノマの時計が欲しいと一度思い出すと、もうその気持ちは抑えられなくなっ

ていた。次の日、学校で　。

- みどり さっち、もうレノマの時計、買った？
- 幸子 ううん、まだなの。でもどうしても欲しいんだ。
- みどり でもお金ないんでしょ？ だったら、やっちゃえば？
- 幸子 何を？
- みどり ま・ん・びき。
- 幸子 え!? できないよ、そんなの。
- みどり 大丈夫だって。わたしも何回かやったけど、捕まんなかったし。バレやしないよ。
- 幸子 で、でも..。
- みどり 真由美と沙樹はパーソンズ持ってるし、君江や奈美もレノマ持ってんだよ。さっちが欲しいレノマ、だれかが先に買っちゃうかもしれないしね。
- ナレーション わたしは、いけないことだと分かっているながら、はっきり断ることができなかった。頭の中は“だれよりも早くレノマの時計が欲しい”という思いで一杯だったのだ。
- みどり (エコー)大丈夫だって。バレやしないよ。
- 幸子モノローグ そうだよ。バレやしないよ。店の中だったたくさん人がいるんだし、時計が一つぐらいなくなっ立って、分かりやしないよ。
- みどり じゃさあ、今日、帰りにパレコ寄ってかない？
- 幸子 え、今日？
- みどり うん。こういうことはね、思い立ったらさっとやっちゃったほうがいいの。一緒についていってあげるよ。
- (効果音) (店内のBGMなど)
- ナレーション わたした地は3階の時計売り場に来た。
- みどり じゃあわたしは、あっちのほうに行ってるからさ。取ったら、何もしないように普通に歩いてくるんだよ。
- 幸子 うん、分かった。
- ナレーション わたしは、みどりに言われるままに、時計売り場に行き、レノマの時計を探した。
- 幸子モノローグ レノマ、レノマ、あ、あった。近くに人はいないよ。ちょうどお店の人はお客さんと話してるし、チャンスは今しかない。
- ナレーション わたしはレノマの時計をさっとポケットの中に入れて、足早に歩き出した。その時だった。
- 店員 ちょっと、その君、待ちなさい。
- ナレーション わたしは心臓が止まり、金縛りに遭ったように動けなくなっていた。全身から力が抜けていくのを感じた。そのままわたしは、お店の管理室へ連れていかれた。相手の人は、売り場の主任らしい、40代半ばごろの人だった。わたしはイスに

座った途端、ドツと冷や汗が出てきた。

店員 君はさっき、時計を取ったよね？

幸子 ……はい。

店員 何で取ったりしたんだ？

幸子 ……。

ナレーション わたしは、あまりの怖さにほとんど口を開けなかった。頭の中では親の顔、先生の顔、友達の顔などがグルグルと回っていて、情けない気持ちで一杯になった。その人に一つ一つ質問され、ただ首を縦に振るしか、わたしにはできなかった。

店員 欲しいものはお金で買うのが常識だが、人間の“欲しい”という気持ちは、金のあるなしには関係ない。だから、その気持ちをいつも正しくコントロールしておかないと、盗んででも自分のものにしようとする。一度これをやったら、もう善悪の区別がつかなくなってしまう。どんどん罪を重ねていくことになる。これは怖いことなんだよ。

ナレーション なぜか、その人のはなしを聞いていると、心が落ち着いてきた。何て言うか、心の中に染み込んでくるようだ。まるで、今まで見えなかった自分の心の中が見えるようだった。

店員 まあ、初めてやったようだから、今回は目をつぶることにしよう。でも、今度やったら見逃さないからな。そうだ、これを読んでおくといい。

ナレーション そう言って手渡されたのは、一冊の小さな聖書だった。わたしはそれをバッグに入れると、逃げるようにその部屋を後にした。本屋のところでは、みどりが不満そうな顔をして立っていた。

みどり 遅かったじゃん。絞られた？

幸子 うん。でも見逃してくれた。

みどり あ、ラッキー！ でもさっち、あの手つきじゃあバレるに決まってるよ。のろいし、取ったあともオドオドしてたし。もっと堂々とやんなきゃ。今度は手本を示してあげるよ。

ナレーション わたしは、あ然としてみどりの顔を見た。全然悪いこととは思っていないみたい。わたしは、そっとバッグの上から、さっきもらった聖書に触ってみた。そして、“もう絶対万引きなんかするもんか”と心の中で誓っていた。ところが次の日

みどり ねえ由美見た？ やっぱさっちが欲しがってたレノマ持ってたの。

幸子 えー、本当？

みどり 本当だってば。妙に自慢してるやつがいるなって思ったら、由美がレノマを見せびらかしてたの。

幸子 悔しい。

みどり 昨日のがうま〜ってたら、今ごろレノマはさっちの手に、だったのにね。

幸子モノローグ 由美が持ってる？ そんな！ 本当は、あのレノマはわたしのものよ。わたしのものよ！（多重エコー）

ナレーション わたしは新たに考えていた。こうなったら、まだみんなが持っていないものを見つけて、自分のものにしよう。でも、あまりお金を持っていないわたしには、どうしたら手に入れられるだろう。どうしたら？ その時、わたしの頭の中に、ふと一つの言葉がひらめいた。

幸子モノローグ 万引き…。

ナレーション それは、二度と思い出してはならないはずの言葉だった。

<後編> 「イエスに満たされて」

ナレーション わたし、木村幸子。青春高校2年生。今、わたしのクラス2年C組では、新しいものがハンランしている。みんな、人よりも少しでも新しい、高価なブランド品を手に入れて、見せびらかそうとする。それで少しでも他人より優位に立ち、うらやましがらせ、自分に従わせようとする。これはまさしく敵地を一番乗り^{いちばんり}に奪取して、手柄を立てようとする兵士の姿だ。かくて我がクラスは戦場。弾丸ならぬ高級品が飛び交う戦場。こんなこと言ってるわたしもそのうちの一人だ。この前、どうしても欲しいものを手に入れたくて、生まれて初めて万引きしてしまった。その時は赦^{ゆる}されて、「もう二度とするまい」と誓ったのに、今また新たにその思いが頭の中をよぎっている。

生徒A わぁい！ なぁ、これ、レノマでしょ？

山川由美 そうよ。前から欲しかったんだけど、思い切って買っちゃった。

生徒B でもこの前新しいやつ買ったばっかしじゃなかったっけ？

由美 そうだけどお、なんかみんなが持ってるんだもん。やっぱだれも持っていないのが欲しいじゃん。レノマ持ってる人はほかにもいるけど、これだったらさ、発売したばかりの最新のデザインだもんね。

みどり (小声で) 何が「最新のデザイン」よ。あーあ、昨日さっちがうまくやったら、今ごろさっちのものだったのに。悔しくない、さっち？

ナレーション もちろん悔しかった。まるで自分のものが奪われたような、そんな感じがした。「何か、まだだれも持っていないものを手に入れて、由美を見返してやりたい。そのためだったら、万引きだってなんだってやってやる」、そんな恐ろしい思いと、わたしは心の中で必死に闘っていた。

先生 はい、今日の授業は作文を書いてもらいます。

生徒 (口々に) 「えー！」 「かつたりい」 etc.

先生 静かに！ テーマは「競争心」。そうね、あなたたちはいろんなことにライバル意識を持つでしょ？ 競争心って、いいことだと思うのよ。そこから進歩も生まれるわけでしょ？ でも、そうやってなんでも自分が一番でいたいって気持ちの中に、

何か危険姓はないのかな。その辺のところを書いてくれればいいわ。匿名でいいわよ。気軽な気持ちで書いてみて。では、始め。

生徒 (口々に)「たぐ分かんねーよな」etc.

ナレーション みんなはブツブツ言いながら、作文用紙にペンを走らせていた。

先生 はい、やめてください。まだ終わってない人もいると思うけど、もう書き終えた人がいるので、その人のを読んでみるわね。えーと、「競争心」ということを考えると、わたしたちの年代が一番多く持っているのではないかと思います...

ナレーション 聞いていると、納得させられるところや、考えさせられるところがおおかった。

先生 (朗読続く)「でも、競争心ばかりに心を支配されてはいけないのではないのでしょうか。なぜなら、競争心はしばしば人の持っていないものを手にしたいという欲望と結び付き、一度その思いに捕らわれると、際限がないからです。次から次と必要でもないものを求めてしまいがちです。でも、わたしたちに必要なものは、すべて神様が与えてくださるのだから、それ以上のものを求めるのはよくないと思います。」 うん、なるほどね。競争心を“物”という観点から見た、こういう考え方もあるわけだ。でも「すべて神様から与えられた」って言えるのはスゴいな。これを書いてくれたのはだれかしら。

長野真理 はい、わたしです。

(効果音) (クラスのざわつきのガヤ)

ナレーション それは、校内でも優等生で有名な長野さんだった。そう言えば、長野さんが教会に行っている、とだれかから聞いたことがあった。

幸子モノローグ “神様はわたしに必要なものを与えてくれる“? ウソ。だったらなぜわたしにレノマをくれなかったの? 神様なんているわけないわよ。

ナレーション わたしは、そう思いながらも、名が野さんの文章が心のどこかに引っかかっていた。それとともに、もらってから一度も開いたことのなかった聖書が、なぜか妙に気になりだした。

幸子モノローグ どこ読んでみようかな。あれ、いろんなとこ線引いてある。これ、ひょっとしてあのお店の人、使ってたんだ。それをわたしにくれたんだ。大事にしてたんじゃないのかなあ。あ、ここにも赤線が引いてある。ええと、いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」“すべてのことについて感謝しなさい”か...。ムリだよ、そんなの。できるわけないじゃん。

ナレーション そう思いながらも、この言葉が頭の中から離れなかった。次の日、学校で。

みどり わたしさ、今すっごく欲しいものがあるんだ。

幸子 また? 今度は何なの、みどり?

みどり 美里のCD! 超欲しいんだよね。でも先月のバイト代もう使っちゃったし。今月のはまだでしょ。だから、一緒に付き合ってくんない、万引き?

幸子 得、またやるの？

みどり いいじゃん。今度は絶対バレないって。だって美里今日発売なんだよ。さっちが欲しいって言ってたT.Mだって、この前出したばっかじゃん。まだだれも持ってないみたいだし。ね？

幸子 うん。

みどり じゃあ決まり！ 今日の帰りね。

ナレーション わたしは、欲しい気持ちと、やってはいけないという思いで、頭の中がゴチャゴチャになったまま、みどりとデパートへ行った。

みどり CD、CDつと。あ、あった。ラッキー！ ちょっとさっち見ててね。だれか来たら教えてよ。

幸子 みどり。

みどり ん？ 何？

幸子 やっぱ、できないよ。

みどり え？ 何よ今更。

幸子 本当にごめん。

みどり ちょっと、さっち-！

ナレーション わたしは、みどりの声を背に、店を飛び出していた。なぜだか自分でもよく分からない。でもあの時、「やってはいけない」という声がどこからか聞こえたような気がしたのだ。

(効果音) (ドアの開く音)

幸子 ただいま。

父 あ、お帰り。友達が見えてるよ。

幸子 え？ だれだろう。

ナレーション 部屋に入ると、長野さんがいた。

真理 こんにちは。

幸子 あ、長野さんか。珍しいよね、うちに来るのって。

真理 うん。ちょっと話したいことがあって来たの。

幸子 へえ！ わたしなんか話？ あの優等生の長野さんが？

真理 そんな、優等生なんて言わないでよ。そんなんじゃないんだから。ほんとはもうどうしようもないオッチョコチョイなんだから。

ナレーション そう言って、自分の性格をユーモアたっぷりに話してくれた長野さんは、わたしが想像してた人とは全然違ってた。とても明るくて、気さくで、そして優しい人だった。

幸子 へえー、そうなの。なんか安心しちゃった。ところで、話って？

真理 うん。木村さんさあ、いきなり言うと、「何だ、こいつ」って思われそうだけど、この前、デパートで万引きしたでしょ？

幸子 え、何で知ってんの？

真理 うん。あの時、お店の人に捕まったでしょ。それで聖書をもらわなかった？

幸子 うん、もらった。もしかしてあの人のこと知ってるの？

真理 知ってるも何も。実はあれ、わたしの父なの。

幸子 えー、お父さん？

真理 あの日、父が帰ってきた時、「今日、自分の聖書を人にあげちゃったから、もう一つ買わないとな」って言ってたの。「だれにあげたの？」って聞いたら、父があの出来事を話してくれて、それが実はあなただったっていうわけ。

幸子 ふーん。そうだったの。長野さん、わたしのこと軽べつしたでしょ。

真理 そんなことないわ。だって人間は罪があるから、だれだって悪いことする可能性は持ってる。木村さんの場合は、その心の中の罪が表に出ただけだもん。

幸子 長野さんて優しいのね。でも、わたしは悪いことをしたから、その“罪”っていうの？ そういうものを持ってると思うけど、ほかの人は持ってないんじゃない？

真理 それは違うな。聖書にね、「曷人、正しい人はいない」って書いてあるの。「一人もいない」って。だれでも罪を持ってる。もちろんわたしも。それに学校の先生だって持ってるのよ。

幸子 そうなんだ。でもやっぱりわたしはダメだな。だって、今までだってたくさん悪いことしてきたし、人のものを見るとすぐ欲しくなるし。

真理 それって、父が言ってたけど、今、大人も子供も、日本中がそうになってるって。わたしも前はそうだったな。人に自慢するのが好きでね。いつも、何でも一番じゃなくちゃイヤだったの。勉強も一番、運動も一番、新しいものも一番。彼氏をつくるのだって一番、なんてね。言い出すと、本と、切りがないくらい出てきちゃう。

幸子 長野さんが？ 信じらんない。

真理 本当だよ。好き勝手なこと一杯やってきた。デモね、何かが足りないのよね。

幸子 そう。新しいものが手に入っても、その時はメチャクチャうれしいけど、あとになると、何て言うか、うまく言えないけど、「満たされてない」っていうか..。

真理 そうなの！ むなしさだけが残るんだよね。そんな時にね、父に「これを読んでみる」って聖書を渡されたんだ。父が「絶対損はしない」って言うもんだから、もうがむしゃらに読んだ。最初はわけ分かんなかったけど、呼んでいくうちに、イエス様がわたしたちのために十字架にかかってくださったことが分かったの。何でこんなわたしたちのために死ななくちゃいけなかったのかって言うとな、わたしたちが罪を赦されて、天国にいけるためなんだって。

幸子 ふーん。

真理 それでね、うん、これは木村さんに話しても、分かってもらえないかもしれないけど、このイエス様を信じて、心の中に迎えたら、いつでも、どんな時でも、イエ

ス様が一緒にいてくれるっていうことが、なんか、実感できるようになったのね。
“イエス様で心が満たされた”っていうか..。そしたら、“あれも欲しい、これも欲しい、何が何でも一番”って思いが、いつの間にか消えちゃったの。わたしの好きな言葉があるんだけど、聞いてくれる？ 『いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。』

幸子 あ、それ、聖書でしょ。お父さんから頂いたのに、線が引いてあった。でも不思議。ずーっとわたしも心のどこかで、その言葉が引っかかっていたの。

真理 わたしね、この言葉をいつも心の中にとどめておくの。そうすると、どんなイヤなことが起きても、祈ることができるし、喜ぶことができる。そして、欲しいものが与えられた時はもちろん、与えられなくても、感謝することができる。だって、本当に必要なものは、すべて神様がわたしたちに与えてくださっているんだもの。

幸子モノローグ 「すべてのことを感謝する」か...。わたしにはとてもムリだ。でも、長野さんにできることが、わたしにできないわけないよね。

ナレーション その時わたしは、目の前で、本当に満ち足りたような笑顔で話している長野さんを見ながら、“イエス様が欲しい”と思わずつぶやいていた。

< 完 >